

斯クシテ段列ノ諸被服ハ丁寧懇切ナル修理ニ依リ見違エルバカリニ更生シ其ノ成果ヲ挙げ得タルハトリモ直サズ同上等兵ノ旺盛ナル責任觀念ト強烈ナル官給品愛護……ナリ（点線箇所はすり切れて滅失し不明）

上等兵ハ平素ヨリ其ノ言動誠心篤ク後輩ヲ助ケ先輩ノ古兵ニ克ク服従シ内務勤務共ニ内務班ノ團結ニ大ナル貢献ヲ為シアリ右ハ誠心克ク部隊精神ヲ遺憾ナク發揮セルモノニシテ他ノ範タリ

山砲第二八連隊第三大隊段列

第四内務班長 原 伍長 印

本冊子ハ合綴シ永久保存シテ精神教育ノ資ニ供スルモノトス

私の従軍期間中の服務生活状況に対するありがたい、またと得られぬ、金銭にも替えられぬ、連隊長からの感状と悪い、家宝として子々孫々に伝え、精神教育の資とし、日本の国民精神の振興にもと考えている。

いわれなき終戦後の体験

愛知県 椎原芳郎

私は昭和十七年徴集の第一乙種現役兵として満州承德（熱河省）の満州独立守備歩兵第三大隊第三中隊に配属された。

万里の長城の麓の山中にある満人部落の中に駐屯している第三中隊で、初年兵として一期の検閲が終わわり、暗号教育を受け、司令部要員として終戦まで暗号兵として勤務をした。

暗号下士官としての教育を受けている最中に終戦となり、錦県で司令部に復帰し、遼陽で武装解除となり、海域に集結させられ、シベリアのチタに抑留されることになった。この抑留中の労苦について以下に記す。

入ッ早々、穴掘りをさせられたことがあった。

昭和二十年十一月九日のソ同盟革命記念日に満州を出発し、二十六日チタ市近郊のチノリフスカヤの収容

所に入った。地下数メートルまで凍結しているから、いきなり掘っても手掘りでは問題にならない。焚き火を一時間ぐらい焚いて四センチ太さの鉄棒の先端を真っ赤に焼いてハンマーで土中に打ち込む。ジュースと十センチぐらい入る。さらにこれを二度繰り返して三十センチぐらいの穴を掘り、ダイナマイトを仕掛ける。

「バーン」と爆音を立てるが小さな穴しかあかない。

私は鉄棒を打ち込むとき、手元が狂って右手の中指の爪が鉄棒に当たって、はがれてしまった。人間の神経は指の先端部分に集中しているそうで、激痛にたえられず、その場に座り込んでしまった。

翌日から作業免除になり、一カ月休んだ。私の中指の爪は、その後、生えてきたが変形して固くなり、五十二年間経った現在でもシベリアの冬を思い出させる。

厳寒のシベリアでは、零下三十度を超えると作業中止で帰隊となるが、監督は帰したくない、私たちの警戒に当たる歩哨兵は帰そうとし、そこで二人で論争を始める。私たちは焚き火を囲んで論争の結果を待つこととなる。

酷寒の表現に使われる「火が凍る寒さ」という言葉があるが、私はシベリアでそれを体験した。確かに焚き火の火勢を強めても火に面した部分は温かいが、背中の部分は全く火の恩恵に浴さない。だから年中、体をぐるぐると回して火に当たらなくてはならない。足が冷たくて痛くなると、靴を焚き火の炎に当たるぐらいに近づける。当然靴底が焦げて、そのうちに煙を出す程になっても足先は温かくなならない。続けて火に当たっていると靴底に焼穴ができてしまう。凍傷の危険が迫るが靴の交換は不可能である。布切れで足を包むくらいしか手当てができないから足の凍傷が多発した。

シベリアには四季の変化は見られなかった。冬が九月から始まり、六月に夏がくる。春と秋はなかった。年中冬將軍との戦いと思えば間違いはない。抑留生活は飢えと寒さと労働との闘いの連続だった。労働といえば、冬の深夜に起こされてチャ駅から引込線に入った貨車の荷降ろし作業はつらいものだった。

空腹を抱えての寝入りばなを起こされて、約二キロ先の現場で、三十センチ以上の太さの丸太を貨車から

おろして集積所まで担いで整理する作業が、やっと終わって帰隊したと思ったら、寝付く暇もなく作業整列の合図がかかるのだから体にこたえた。本当に苦しかった。

半地下の宿舍の屋根に上がって満月を眺め、鉄条網越しに街の灯りを見ながら故国の母や妹を思い、「この月は日本の空にも出ているのだ。母はこの月を見ているだろうか。満州に来ていた兄は無事日本に帰っただろうか。入営時に体が弱かった妹は丈夫になっただろうか」と、その安全を祈った。このときの情景だけは帰国しても思い出すことにしようと、心に刻み込んでくる。その頃の私は、もし今のような苦役が続いたなら二十二年の冬を越す自信はなかった。なんとしても母や妹の待つ日本に生きて帰らなければならぬと決意した。

ある日、私は広場に面した宿舍の屋根に上がり、たまたま集まっていた戦友の群れに向かって「ノルマに追われる生活から脱け出よう。帰国までは何としても

生き抜こう。労働は要領よくやろう」という旨の演説をした。今から思えば無謀極まるアジ演説だった。誰かにソ軍に密告されれば万事休す。ソ同盟に対する反逆罪で二十五年の刑になるところだった。

昭和二十一年の六月頃、コルホーズ（農場）に馬鈴薯の種芋まきに行ったときは、ダモイ（帰国）の噂が出ていた頃だったので、今までの酷使された恨みを今こそ晴らすときだと思い、腐った芋だけをまき、良い芋は外套の内側を破って袋状にした中へ詰め込んだ。

今年の収穫どきには俺たちは日本だ。ヤポンスキー（日本兵）のまいた畑は芽が出ないなあーと、がっかりさせてやれ！ 哀れな捕虜のささやかな報復であつた。

収容所の生活は、まさに人間の本性をさらけ出した赤裸々なもので、食欲こそ人間本来の動物的欲望であり、これが満たされて初めて性欲、物欲が生じるのであり、政治の根本は国民を飢えさせないことにあると私なりに信じるようになった。

思えば昭和二十年の冬に入ソしたが、この年のソ連

全体が農業不作と独ソ戦による国土の荒廃が重なり、ソ連自体が食糧不足に襲われていた。

収容所長が率先して食糧の横流しをやり、発覚してどこかに姿を消した。おそらく刑務所行きになったのだろう。日露戦争に参加したとかで、赤い縦線の入ったズボンをはいた、白髪の老軍人だった。

食糧不足のなかモスクワから空輸された馬鈴薯の選別により出されたが半分は腐っていた。その腐れ芋も我々には貴重な食糧であった。

食糧の分配は最大の関心事であった。わずかな黒パン一片が生命を左右するので、はかりによって公平に分配された。さおが水平か否かに何十の眼が注がれた。またスープの分配も難しかった。乏しい汁の実もいったん取り出して分けた。汁の実が豆類のときは粒数を手等に分けねばならない。分配がようやく終わった頃には汁は冷めきってしまう。

分配されたパンや汁をどのように食べるかは各自の自由である。そこで個人の性格がじゅうぶんに発揮される。一日分のパンを一度に食べて満腹感を味わう者

チビチビ食べて食いつなぐ者、人様々であった。中には他人にパンを盗まれてからは一度に全部食べる方針に変えた者も出始めた。少量の食事では満腹感がないので、水を足して量を増やすいわゆる水増し食事が流行し、一棟に一個しかないドラム缶ストープはいつも繁盛していた。しかし、この水増し食事が恐るべき栄養失調の引き金になったのだが、そんなことは知る由もなく、一時の満腹感を求めて誰もが「水増し」に群がった。

眠っていても、我慢できるだけ我慢した揚げ句に起きるのだから便所にたどり着くまでに辛抱できず出口で放水開始。だから建物から黄色の水路が便所まで続いていた。

戦後、いろんな抑留体験記が出てそれぞれの地方の収容所の様子が判明しているが、労働の軽重が死亡者の数に比例しているのが分かる。炭鉱、建築現場、伐採、鉄道建設など各種あるがバム鉄道の建設はレールの枕木一本に一人の日本人が死んでいるといわれている。

私がいかに見たのは、奥地森林の伐採作業から帰った人たちであるが、まず顔がピンク色に腫れていて眼が赤く充血している。一見肥えているように見えるが実は食料が途中でなくなり、満足に補給がなく、水増し食事のため栄養失調の水膨れになっていたのだ。

この鉄道建設と森林伐採の二つが死亡者の過半を占めている。死亡者といえは入ソ途中に列車から飛び降りて逃げようとして警乗兵に射殺された者や、奥地で作業中に事故死した人の住所氏名は果たして記録されているのだろうかと疑問に思えてならない。私の収容所でもある日、作業に出発前の我らの眼前に血まみれの死体二体が地上に放り出されていた。通訳の説明によると逃亡者が軍用犬に噛み殺されたので見せしめのためにこの様に置かれていたのだ。

不法に抑留された者にすれば逃げ出したい気持ちは誰でも持っているのが当たり前のことである。私も入ソが決定したときは脱走を考えたが中国語が喋れないし、陸続きならいざしらず何といっても日本海を渡らなくては日本にたどり着けないということが決定的な

原因で、脱走は断念せざるを得なかった。

血まみれになって放置された人にも親があり、兄弟もあるだろうに、かわいそうでならないが、無力な我々は何もしてやれず、ただただ心の中で手を合わせるだけだった。しかし、無法なソ連に対し怒りの炎は燃えていた。この哀れな二人の氏名、そして住所などの記録は恐らく逃亡者の烙印に消されて永遠に不明のままであろう。確かめる手段は無いのである。

入ソ早々の日本軍は作業隊編成のまま、中隊、小队、分隊の組織は温存されていたが、日本軍の団結による反乱を極度に警戒したソ連当局は、日本軍の組織を分断するために、まず将校を別の収容所に隔離し、ついで兵士の転属、作業隊の組み替えを頻繁に強行した。昨日までいた者が突然いなくなる例は日常茶飯事になり、兵は周囲の変化に無関心になっていった。

また兵士の所持品の検査は卑劣な方法で行われた。我々は入ソに際し、在満時代からの私有物を持てどだけ持ってきた。食料不足にもこれらの品物を住民のパンと交換して空腹を満たしていた。時計、万年筆は

番先にソ連兵に取り上げられて姿を消していたが、床下などには結構白米や砂糖がかくされていた。「東京ダモイだ急いで集合！」の声に喜んで整列した留守に家探して私物を没収する。この手を何回も繰り返され、「ダモイ」の甘言に乗せられて裏切られ、不信感を募らせたときには私有物はスッカラカンになっていた。だから抑留者全員が異口同音に吐く言葉は「ロシア人はずるい」「ソ連にだまされた」であった。ソ連に対する反感および不信感はいわゆるの世代が生きている限り続くであろう。「ダモイ」にだまされた回数はいくらも数え切れないのであるから。

不法に抑留された六十万人の日本人のうち六万人が殺された。領土は、樺太、千島列島が奪われ、満州の工場の機械設備一切が持ち去られ、家畜、食料の一切がソ連領内に運び込まれた。

わずか一週間の一方的な侵略戦争でこの様な莫大な戦果をあげた例は古今東西ないであろう。

満州に侵入したソ連軍の暴行、略奪、強姦、殺人の戦争犯罪は世界の処罰を受けることなく半世紀が過ぎ

た。

私は栄養失調のため昭和二十二年六月帰国できたが、早い方のダモイだった。病床にあった妹は私の帰国を待っていたかのように一週間後に逝った。母、兄は健在だった。

ソ連社会が想像以上に低級だったことは意外だった。極端な鎖国主義で外国文化に触れることが無いためか、炭鉱夫が我々に向かって天井につるされた電球を指して、「日本にこんなにも明るいものがあるか？ 無いだろう」と誇らしく問いかけた。その電球のマークは「マツダ」であった。時計はロシア人好みのメダルに見えるのだろうか、両腕に十個ぐらい巻きつけていた。針が動かなくなると壊れたと思うのか何の未練もなく捨ててしまう。

水道は全く無く、もっぱら街に一カ所しかない井戸から大きな樽を積んだ馬車が運ぶ給水に頼っていた。井戸は動力ポンプでくみ上げて樽に給水していたが、あふれた水が井戸の回りに凍りついて小山のようになっていた。番人の老爺が切符を受け取るとスイッチを入

れていた。

タバコはヒマワリの茎を細かく刻んだものを乾燥したもので、「マホルカ」と呼んだ。両切りや吸口付きは高級品で一般労働者には縁がない。マホルカを紙に巻いて両端をひねり、重なった部分を口でぬらして火をつけて吸う。甘い香りでなかなかいける代物であった。

黒パンは酸味が強く、入ソ当時はほとんどの人が食べ残したのだが、他に食う物がなければ嫌でも食わざるを得ず渋々食っているうちに口に合ってきて、しまいには目の色を変えて分配を見守るようになっていった。原料は燕麦で、日本では馬の餌に使っていると知らされ、とうとう馬並みに落ちぶれたかと情けなくなつた。

炭坑作業にはロシア人の監督がついた。初代の監督は整った顔をした、いかにも西洋人らしい人物で金色の毛が腕一面に生えていた。二代目はニコライと名乗る少し言語障害のある痩せた背の高い人で、鳥打帽の頭に尖った「つまみ」がついていた。ドイツ軍の捕虜

になった元軍曹であつただけに同じ境遇の日本兵には理解ある監督だつた。

ある日、坑内で大きなスコップで石炭をコンベアに積み込んでいた私は体力が衰えていたので、非常に辛かつた。突然コンベアが止まったので助かつたと思ひ、その場に座りこんでしまった。ほの暗い灯りの下で一人座つた私は突然止まつたコンベアが故障したものと思つていたが、再び動き出したコンベアが、その後の私の体力に應じるように疲れた頃に止まり、しばらくしてまた動きまた止まる。実はニコライの思いやりであつた。

この体験文が後日壁新聞に掲載され、それが縁で文化部員に推薦され、肉体労働から解放され、私の肉体の大きな助けとなつたことを思うと今でもあのニコライの顔が浮かんでくる。

収容所で働いていたロシア人が数字に弱いとは意外だつた。毎朝、作業整列が終わわり人員点呼が行われるのだが、人数を数えるのに延々三十分はかかるのには参つた。とくに冬季には体力消耗につながつていった。

兵隊ならいざ知らず、エリートと目された将校でも掛
け算ができないのにはおどろいた。一人一人数えるの
だから時間がかかるのは当然だ。途中で数え切れぬと
再び最初からアジン、ドアー、ツリー（一、二、三）
と始まるので始末に負えない。

独ソ戦でソ連の捕虜になった独軍兵士は直ちにシベ
リアに送られ、強制労働に服していた日本兵と入れ替
わりにどこかへ移動したらしい。私が入った建物は半
地下式で屋根だけが地上に出ており、ドイツ人が建て
て直前まで住んでいた。炭坑にももちろん入っていた
そうだ。ロシア人坑夫の話によると、ドイツ人は無蓋
貨車に積まれた石炭の山に潜んで脱走に成功した例が
あり、それからは警戒兵が一両ずつ銃剣で石炭の山を
突き刺して点検するようになったとのことだった。

日本人はノルマを与えられると「請取」という方式
で短時間に精力的に働いてノルマを完了させて早く帰っ
て休みたい。これが逆効果になり次の日のノルマを上
げさせることになり、労働強化が体力消耗へとつながっ
ていったのである。

抑留された日本兵が作業している所へ近づいてきた
現地人が、小さな声で「私は日本人です。ノモンハン
で捕虜になりました。皆さんは、いずれ帰れますから
よろしいですね。私はいまさら帰れませんよ。」「名前
は、生まれは」と尋ねても遂に答えず姿を消したとい
う噂が流れた。集団で捕虜になった者には希薄な感覚
を反省させる噂であった。

昭和十四年のノモンハン事件の後遺症が残されてい
ることを思うと、戦争の愚かさを強く感じたものであ
る。

炭坑で働く女囚から「強く誘われて困ったよ」と語
る者もいた。独ソ戦で男子不足が深刻なシベリアでは、
兵隊以外の若い民間人の男は少なかったから結婚難は
想像以上のようなようだった。

我が国は今まで戦争に敗れた経験がないために、捕
虜に関する国際条約などには全く無知であり、教育も
受けていなかったから捕虜の権利や待遇に関する知識
は全くなかった。その点ドイツ人は捕虜の権利を承知
していたから、少しも卑屈にならず堂々と主張すべき

ものは主張していたらしい。

強制労働には従わずノルマは無視して朝から晩まで、のらりくらりと体を動かして常に働いていた。時間がくると動かなかったそうである。団結心が強く仲間を売る密告などは絶無であった。それに比較すると日本人の態度は恥ずかしいものが多く、大いに反省すべきであった。

私の二年間の抑留体験で痛切に感じた点は、情報からの隔離であり活字との絶縁であった。平成の今は、あふれる情報と活字のはんらんである。昭和二十一年の夏頃から『日本新聞』が配布され懐かしい日本語の活字が久しぶりに目に飛び込んできた。一字一字食い入る様に読んだ。あの時の感激は今でも忘れられない。

『日本新聞』には故国の敗戦による惨状が書かれていた。「東京の市民は食う物がなく、炭俵のワラを食っている」と、そんな馬鹿な……。今にして思うと『日本新聞』以外の情報は何もなかったので、『日本新聞』に書かれている事は全て真実として信じてしまっていた。ここに情報の恐ろしさがある。私も帰国の船に乗

るなり真っ先に船員さんをつかまえて発した質問は「日本では炭俵を食っているんですか？」だった。今でこそ笑い話だがマスメディアの恐怖を体験した次第である。

昭和二十年は環境の激変に加えて、重労働と食料不足のため栄養失調による死亡が激増した一年間であった。死亡者を埋葬に行くたびに倍増する墓標を見て、自分もシベリアの土になるのか、と弱気になり、体力の激減が恐ろしかった。墓標に書かれた死亡者の肩書の半分は初年兵の二等兵が占めていた。意外なのは下士官の軍曹が多かったことだ。凍土のため死体の埋葬も形だけのもので、周囲の土まじりの雪で覆う程度しかできなかった。

平成元年になって抑留死亡者名簿が市販されたが、既述の増田の名が載っていたので、記録が残されていたのだなとソ連の事務処理に対する認識を改めた。

身体検査は毎月一回、ソ軍女医の前で裸になり、尻の肉の張り具合で一〜三級とOK（オカ）の四種に分けられ、一〜三級は就労、OKは休養して体力回復を

凶るという仕組みになっていた。私も炭坑作業の末に、OKになったが、また三級になり学校建築現場に出た。しかしすぐにまたOKになり、昭和二十一年四月、温泉で療養するといわれてチタ市三八一収容所に送られたが温泉はなく、帰国を前に体力回復を図るための休養所のような感じだった。ソ連も瘦せ細った日本兵をそのまま日本へ帰すと、捕虜虐待の事実を世界に証明することになるのを考慮したのでだろうと推察される。

この収容所は今までの数倍の大きさで、多くの日本兵が各地から集められていた。ある日、偶然にも同郷の清水三夫さんに会い奇遇を喜び合ったが、再びお目にかかることは無く、無事帰国されたことは私が帰国してから聞かされた。

共産主義による洗脳教育は『日本新聞』を中心に各種の文化活動と称してソ軍の政治委員が核となり「ダモイ」まで続けられた。

昭和二十二年五月、帰国を前にスターリンに対する感謝文に署名を求められた。「何が悲しくてスターリンなんか感謝だ！ 何人殺されたか知っているか、

感謝されたいのは俺たちだ。馬鹿なことをするな！」と文化部長にかみついた。「いや、実は私もあなたの言う通りだと思う。しかし他の収容所でも署名しているそうだから、こっだけ拒否して万一ダモイ中止にでもなったら大変だ。ここは一つ日をつぶって我慢しようじゃないか」と諭された。いつのまにこんな立派なものを作ったのか、全長五メートル、幅一メートルの布製の飾り縁がついた代物に、達筆で感謝決議文が書かれ、末尾にスターリン大元帥万歳と結ばれていた。帰るためならと自分に言い聞かせて署名したが、心の中では「必ずかたきを取ってやる。覚えておれ」と叫んでいた。

昭和二十二年五月二十七日、ダモイの喜びを乗せた貨物列車はチタ駅を出発した。間違はなく東に向かっていた。二年前入ソして以来何十回となく、東京ダモイとだまされた苦い思い出があるだけに、皆も口々に「今度は大丈夫だ。帰れるぞ」と喜んでいた。

三日後、ハバロフスク駅に着いたが、傍らの線路上には大きなソ軍の戦車を積んだ台車が次から次へと切

れ目なく続いてモスクワ方面に走って行った。満州へ侵入した戦車の引き揚げだと思われた。

六月二日、待望のナホトカに到着した。引揚船に乗るまでに三つの関所が設けられていた。それぞれの関所には、日本人の共産黨員らしい人がいて、赤化の程度を検査するらしかった。女性も声を張り上げてアジ演説をぶっていた。須藤啓子とか名乗っていた。久しぶりの日本女性に関心が集まって、話を聞くより顔に見入っていた。

彼女はその後どうなったのだろうか。戦後の情報によると、シベリアで日本人教育に権力を振るった「民主グループ」は、ソ連邦に対する犯罪人として処刑され、行方不明になったという噂が飛んだ。事実とすれば同胞を食い物にした連中だから因果応報だと思いが、ソ連の悪行はとどまるところを知らずである。三つの関所を通過する間に一人でも規律違反が発覚すると隊全部が再び奥地へ強制送還された。

ソ連の鎖国主義か秘密主義か知らないが、所持品検査は特に厳しく、印刷物、記録、名簿類は持ち込み厳

禁で一切没収された。だから収容所での日記や死亡者の住所氏名などの記録、隊員名簿は日本に持ち帰れなかった。隊によっては事前に隊員の一人一人に「お前は死んだ誰々の住所と死亡月日を覚え込め」と記憶させたそうだ。

第三支所を無事通過した我々の眼前に、日の丸を船尾に掲げ黒い船体に白ペンキで「米山丸」と船名が書かれた船があった。母を見るような温かいものを感じた。タラップの第一段を踏みしめて「よし！ もう大丈夫だ、日本に帰れるぞ」と自分に言い聞かせた。

「御苦労様でした」と船上で迎えてくれる赤十字の看護婦さんが女神に見えたのを覚えている。さっそく「日本では炭俵を食べているって本当ですか」と船員さんをつかまえて質問した。「えっ！ そんなことはありませんよ」と笑われてしまった。「やっぱり。そうだよな、炭俵なんて食えるはずないよな」。これは教育の恐ろしさの実例である。

乗船して四日目の六月十日、舞鶴に下船した。今まで切実に考えもしなかった「捕虜を迎えてくれるだろ

うか。『戦陣訓』の「生きて虜囚の辱めを受くるなかれ」が突然二年の歳月を越えて飛び込んできた。ナホトカの関所の教えは「諸君は天皇制打破のために日本に敵前上陸する尖兵である。帝国主義を打ち負かす勇士である」であった。もちろんこの教えは乗船と同時に雲散霧消した。日本の船に乗った途端日本人に戻ったのだ。しかし津波のように襲ってきたのは、「戦いに負けて捕虜となり、おめおめと生きて帰って良いのだろうか」ということだった。「恥を知れ、生きて帰るな」式の教育で育った者が味わう苦しみである。

私の心配は杞憂だった。舞鶴の平棧橋にはあふれるばかりの日本人が手を振って迎えてくれたし、帰還列車の車窓から懐かしい風景に目をやっていったとき、畑で農作業に励んでいた老農夫が列車に向かって「御苦労様でした」とでも言ってくれたのだろうか、頭を下げてくれてから手を振ってくれた。ありがたさに涙がこぼれた。「祖国日本は俺を迎え入れてくれたのだ」。

シベリアの月は日本でも光っていた。安否が心配だった兄は、終戦の一年前に帰国し群馬県で小学校の教師

になっていた。妹は病魔に冒され、瘦せて骨だけの身を結核病棟のベッドに横たえていた。危篤の状態だった。私の無事を涙を流して喜んでくれたが、一週間後に逝ってしまった。まるで私の帰るのを待ちわびていたかのようなだった。私の出征のときには、少量の血液を吐いていたので心配だったが、青春を楽しむことなく逝った、本当にかわいそうな妹だった。内地でも食糧難で栄養になる物を与えられなくて……と母は悔やんでいた。今なら死なずにすんだのにと思うと、妹も戦争犠牲者の一人だったのだ。

母は、私の無事生還を祈って仏壇に陰膳を毎日供えていてくれたそうである。親の子を思う心は何にもまして尊いと思った。

戦争は、私の家庭にも大きな影響を与えた。食糧難のため農村地帯に移り農家の二階に間借りをしていた。それを知らぬ私は舞鶴から生まれ故郷の地に帰ったが、家は無く誰もいなかった。復員しても、ゆっくり養生する余裕もなく仕事を探さねばならなかった。入隊前の仕事場は将来性が無い。義兄が妹の葬儀に名古屋か

ら来た。近く独立するので手伝ってくれと頼まれ、さっそく名古屋で建築工務店を義兄と二人で始めたのが縁で五十三年間も名古屋市民となっている。

帰国したときに、変化に富んだ私の人生遍歴をいつかは記録に留めたいと思い、軍隊、抑留時代の記録を頼りに大学ノートに書いておき、順次細かく書き加えようとしていたのが、ノートを持ち歩いた末に東京御徒町駅のロッカーに置き忘れてなくしてしまった。大失態であった。

今回、思い出すまま書いたが、当時の情景が浮かんでくるときもあり、順序が前後することもあるが、物事を文章に書き留めることの効果というか、鉛筆を走らせているうちに次から次へと思いついてくるのが不思議な程であった。

作戦軍の補給動脈

湘桂作戦中の輜重隊

栃木県 小泉悦郎

私は福島県会津若松市滝沢町一六八番地で、大正十一年三月二十一日に生まれた。家は農業だったので体力には自信があった。徴兵検査を受けたのは、昭和十七年八月二十日、会津若松市の公会堂だった。何人ぐらい検査を受けたか細かいことは忘れた。昭和十七年というと、大東亜戦争も勝ち戦の時で、我々若い者も戦地へ行かねばならないと覚悟をしていた。検査の結果は第一乙種ではあったが、当時は甲種合格者と一緒には現役兵になつた。

入営は、昭和十七年十二月一日、宮城県仙台市の青葉城にある部隊で、東部第三十一部隊だった。その隊は輜重兵連隊で、第二師団、輜重兵第二連隊の留守隊であったと記憶している。輜重兵隊は車両や駄馬と一